

1924年（大正13年）鹿児島市生まれの祖母が、戦後50年の折に、自分の誕生から戦後に至る記憶を辿って手記を書いた。それから20年経った年、自らの戦争体験を私に語り、ノートに書いた手記を見せてくれた。その後、90歳の祖母と鹿児島を旅行して、市内をあちこち巡り、空襲で逃げた城山から市内を見渡し、女学校時代から結婚するまで住んでいた下荒田の親戚の家を訪問。旅行中に食事をしたレストランの若い店員は、鹿児島が空襲で焼けたことを知らなかった。この体験記は、他の方にも読んでいただけるよう、親戚の名前を出さないことなどを条件に、本人の許可を得て、私が少し手を加えまとめたものです。 富田牧子

【鹿児島空襲】

昭和16年3月に女学校を卒業し、鹿児島市役所に勤めていた。12月8日、天気は晴れ、観光課の課長が「アメリカと戦争が始まった」と教えてくれた。昭和20年3月に夫と見合いをし、12日目の4月2日に、鹿児島市内は空襲の危険があったため喜入の実家で結婚。市役所の近くの親戚の向かいの家を借りていた。夫は若い時から心臓が悪く、軍隊の兵役検査では即日帰宅、^{りょうまつしょう}糧秣廠に勤めていた。

昭和20年6月17日の夜 [補足1]、夫は当直で留守、山下町の家で一人暮らし。

その頃は食糧事情が悪く、毎日の配給では野菜の代わりに鹿児島の特産品のビワだった。その日の昼間の配給はジャガイモと米が少し。明朝の為に米を研ぎ、お釜をカマドに据え、セメントで出来た小さな流しの下に配給のジャガイモを置いていた。夫が^{りょうまつしょう}糧秣廠から貰ってきた鮭缶と牛缶は、茶箆筥の引き出しに入れていた。

寝る時も着の身着のまま、モンペで休んでいた。電燈をつけて本を読みながら横になっていた時、空襲警報のサイレンが鳴った。町内会の警防団員の声で、灯りがもれているから消すように、と云って回るのが聞こえる。すぐに電燈を消し、向かいの親戚の家に行き、叔母とその息子と三人、土蔵の中で布団を被って隠れた。本来なら防空壕の中に逃げる所だが、梅雨の時期で雨が多く、防空壕の中は水浸しで入れなかった。

時間がどの位たったか分からない、暫くしたら消防団の人たちが「家から早く逃げなさい。家には誰もいないの」と大声で云うのが聞こえた。布団をめくったら、夜中で真っ暗な筈が、昼間のように明るく吃驚した。「早く逃げなさい」「火がそこまで来てる！」と声がした。荷物を持って逃げなければと思い、斜め前の自分の家に走った。家の前から見ると、東は市役所の方から火の海、まるで海の波のように火が唸って寄せて来る。西は、郵便本局や西本願寺の方から、同じように火の海がウーウーと無気味な唸りを上げて寄せて来る。

*補足1： 鹿児島市は1945年3月18日、4月8日、4月21日、5月12日、6月17日、7月27日、7月31日、8月6日の計8回の空襲を受けた。それにより市街地の93%を焼失。米軍は3月26日に沖縄県慶良間諸島に攻撃、4月1日に沖縄本島上陸、6月23日終結（ということになっている）。沖縄に向かう特攻機の基地が鹿児島にあったため、特に鹿児島市は米軍の攻撃が激しかった。6月17日の空襲は最大で最も悲惨だった。午後11時5分に攻撃が始まる。今までの爆弾攻撃を変更して、深夜に全市を焼き払う焼夷弾作戦の第一弾だった。梅雨の時期、13日頃から雨が降り続いていた。

怖さを感じるより、何とかしなければ、と家に入る。家の中も同じように明るい。辺りが火で囲まれて昼のよう。二階の襖と障子に火が燃え移れば家が全焼すると思い、襖と障子を全部はずし積み重ねて、下から何度もバケツで水を運びその上にかけて濡らしておく。その時は、そうすることで家が守れると思った。

玄関脇の小部屋に、嫁入りの時に母が準備してくれた普段使っていない掛布団と敷布団を、布団袋に入れて置いてあった。その中には、幼い弟と妹のために[私が]作った服や土産物も入っていた。一人で逆も持つことが出来ないような大きくて重い袋だ。大事なものを焼いてしまうわけにいかない。火事場の馬鹿力と云うものか、郵便局本局の広場まで一人で持って行き、まわりに何も無い広場の真ん中にドンと置いた。ここなら焼けることもないと思った。

叔母は私が家に戻った後、大事なものを土蔵の中にしまい、水を入れたバケツを何杯も入れて鍵をかけた。家に引き返した私は、持って逃げるものを探す。ここのところ暫く警戒警報がなく B29 も来ていなかったのも、非常用の袋から荷物を出してしまっていた。タンスを開けて、あれもこれもと思うが、火の海はだんだん近まるし、気持ちが急いで何も探せない。頭の中は真っ白。防空頭巾と袋にその辺の物を入れ、夏布団や空バケツを持って叔母の家に戻る。叔母は玄関前の広い所に荷物を置いて、ブリキの貼った雨戸を被せようとしている。父の形見の大きな牛革のトランク（満州から持って帰ったもの）に服などを詰めてあったのを思い出し、雨戸の下に入れて貰った。

さあ、どっちに逃げてよいのやら。西からも東からも南の海の方からも火が押し寄せて、城山方面（北）にしか行く所なし。逃げていく人がぞろぞろ城山方面に向かう。私たちも行く。城山に登る道なぞない。道のない草丈の所をかき分け乍ら中腹まで登る。市内がよく見える。

天文館の方から押し寄せた火の海が次から次に移って燃える。やや暫くその様子を見る。西本願寺に火が移ったヨ、と誰かが云う。西本願寺が真赤に燃えている。みんな、何とも云えない気持ちで見ている。火柱、火の屋根、と思った途端、ガサーっと崩れ落ちる。納骨堂も同じように崩れ落ちる。今でもその時の光景が見える。

西から東から火が押し寄せ、あの火の海に呑まれたら小さな家なぞひとたまりもない筈。皆がてんでに叫ぶ「ああ、今度は何処に火が移った」。もう、どうしようもない。

私たち三人は城山を越え、夫の勤め先の小野の防空壕内の糧秣廠りょうまっしょうへ向かう。夜中じゅう歩きに歩いて、朝7時に着いた。食べる物一つなくお腹はペコペコ。糧秣廠りょうまっしょうで朝食を出して貰い、生きている事だけを感じる。暫く休んだ。私の運んだ荷物を夫が持ってみると、2人でも持てない程の重さ。ホッとしてか、力が抜けてしまったんだろう。

夫もその夜、山下町の家が心配で、電車道から棧橋の湾の方を廻ったのだった。火のない所を歩いて家にたどり着いたら、逃げた後で誰もいなかった。角のお菓子屋の菊屋の叔父さんが火ダルマになって自分の家にバケツで水をかけていたそうだ。

四人で早速焼け跡に行ってみることにする。午前中歩いて家に着いたが、何も残っていな

い。全市が焦土と化している。親戚の家の土蔵が一つそのまま立っていた。近くに朝日新聞社のビルがあった〔朝日通り〕が、セメントは全部焼けて鉄筋丈残って屋根もない。

家は全部焼けて、二階の襖障子に燃え移らないように水をかけたのも何もならず、ブスブスとくすぶり変なにおいがする。流しの下に置いていた配給のじゃがいもは煮えており、お釜の方は木の蓋はすっかり燃えて跡形もなかったが、米は炊けていた。私たちは早速、じゃがいもとご飯を新聞社の建物へ運んだ。水道水は何処でも蛇口から水が溢れていた。手を洗い、お握りを作った。その場しのぎのものを食べ、水道から水を手ですくって呑み、お腹を満たす。

下荒田や郡元^{こおりもと}方面、冷水方面や池之上、鹿児島駅は残る。池之上町の親戚の家はそのままだったので、私たち二人住まわせて貰うことにする。そこの叔母は年老いた両親と一緒に三人で暮らしていた。

ひと月経った7月27日のお昼、暑く太陽がギラギラしていた。B29が空高く銀色の翼を旋回させながら何機か来た。警戒警報と続いて空襲警報。洗濯物を取り入れないと敵機の目標になる、と急いで取り入れたら、あちこちから、爆弾が落とされる、と声が出る。池之上町の親戚のおじいさんは具合が悪く休んでいた。おばあさんはおじいさんの側に座って「早く逃げなさい」と云う。叔母と私は裏庭にある防空壕の中に入ろうと戸口を開けると、壕の中は雨水で一杯。入口のほんの少しの水のない所に、二人はしゃがんで戸を閉める。暫くするとB29の飛ぶ音と同じようなゴーと物凄い音がして、何か飛行機から落ちてくるような、自分の背筋に直撃したかと思うような物凄い爆風。防空頭巾を両手で押さえ、もう駄目だと思った。ひどい爆風の後、どこか近くでドカンと大きな音とともに地面もぐらぐらと動く。生きた心地しないとはこんな事だろうと思う。

静かになってから、ソッと戸を開けて外に出てみる。真昼の太陽が相変わらず照りつけているが、住んでいた家が半壊し、屋根が落ちそうになり柱は斜に曲り、壁土がモウモウと立ち煙っている。

すさまじい、こわいこわい一瞬に、おばあさんはおじいさんの上に覆いかぶさったようだ。壁土、屋根からの土が二人の上にばらばらと落ち、死ぬ時は二人一緒と云う気だったのだろう。動けないおじいさんをかばい、どんなにこわかったかと思う。

近所の人たちと兎に角何処か逃げなければと、叔母はおじいさんをおぶい、私はおばあさんの手を引いて吉野の方へ逃げることにした。近所の人たちと一緒に何処の道をどう歩いたか分からない。人の列から離れたらほぐれるのでただ夢中で歩く。叔母はおじいさんをおんぶして、どんなに重かったらう。山道の細い所を何人もが列を作って逃げていった。

その日に鹿児島駅に大きな爆弾が何個も落とされた。その当時、西鹿児島駅ではなく鹿児島駅が本駅で、鹿児島本線、指宿線、日豊線等全線の始発終着駅だった。現在では西鹿児島駅〔鹿児島中央駅（2004年改称）〕から殆どが発着している。

1時頃の本駅は、今から出る汽車、着いた汽車、買い出しの人でごった返していた。人が

一番混み合っている時を見て爆弾を落とした。それは一たまりもない。買い出しから帰り大きな荷物を背負った人、今からの人、何百何千の人が、誰が誰やら跡形もなく死んでしまった。全くむごいことをする。その後暫くは鹿児島駅にはこわくて行けなかった。鹿児島駅は淋しく異臭がして、カラス丈が沢山舞いカァカーと物悲しかった。

もう鹿児島市の市内は下荒田方面が残っている丈で、空襲で見るも無惨な焦土化された市になってしまった。

市役所に手続きで用があり、何処を通ったのか未だに分からないが、上町の方だったと思う。樹一本なく、強い陽が照りつける、焼け尽くされたガレキの中を歩いた。所々にブリキ板が被せたもの、その端から死んだ人の手足がにょっきり出ていたり。吃驚して飛び上がり乍ら歩く。誰が誰だか分からない。死骸を藁でくるりと包んだものを、魚屋で大きな魚を動かす時に使う器具〔手鉤?〕でひっかけて、荷車に山積みし、運んでいるのを見たことがある。余りたくさんの死骸で、棺桶に入れるなんて丁寧なこともできず、その資材もなかったと思う。伊敷の何川か分からないが、その川原で焼いて、大きな穴を掘って埋葬すると聞いたものだ。

池之上町で焼き出されてもう行く所もなく、伊敷小野の糧秣廠^{りょうまっしょう}の壕のある山の頂上にある家の玄関間の三畳を借りることになり、8月初めから移る。

山の上丈に空も近く、B29の翼もよく見え、乗っている人まで見えるようでこわい。山の道の左側が、その辺一帯の住民たちの山の壕になっていた。その夏の暑さは格別で、夜も昼もただ暑かった。B29のキラキラ光る銀色の翼が何機も巡回しては弾を落とす。毎日同じことの繰り返しで、肉体的にも精神的にもまいってしまった。

沖縄に〔米軍が〕上陸したのが昭和20年4月1日。沖縄に上陸して沖縄の人たち殺された、今度は鹿児島県上陸だ、これも時間の問題だ。と噂も飛び、又信じていた。

広島原爆、長崎原爆、次から次と戦禍は厳しくなるし、毎日のB29の飛行、空襲。落ちていて食事も出来ないし、眠ることも出来ない。着たままの姿で何日も洗濯する間もなく毎日をすごす。ただただ逃げ回っている丈。まだ若い21歳の夏だから、この苦勞、疲勞も耐えられた。が、いくら若くても6月の空襲で焼け出されて以来、転々とし、毎日どんどんはげしくなる戦火には流石に疲れも出て、どうでもいい、どうでもしてくれ、と云いたい程。暑さは厳しいし、食事らしい食事をしてるわけでもなく、防空壕に入ったり出たり、それも長袖モンペに防空頭巾（綿入れ）を被って、疲れきっていた。

【8月15日 終戦の日】

お昼頃、天皇陛下の玉音放送があった。私たちはラジオを聞く余裕もなく、日課の如く動き回っている。人の噂と云うのか、誰からともなく聞こえて来た。「もう戦争は終わったそう、今、天皇の放送があった」と聞く。

「終わったの、もう逃げなくていいの、もう B29 は来ないの、よかったー」これは本音。日本が負けたなんてどうでもよかった。逃げなくてよいのが何より嬉しかった。もう疲れ果てた。もう身体はクタクタ、これ以上戦争続いたら国民はどうなるのか。後に見たり聞いたりした、玉音放送を聞き乍ら皆土下座して泣いている姿。当時、自分にはそうする余裕は全くなかった。

終戦になって暫くしたら、大きな台風 [1945年9月17日の枕崎台風] が来た。暴風雨はげしく、山の上なので風当たりも強く、私たち借りている部屋の床の間の壁が風で飛び、そこから風と雨の物凄い事、家の中にもいられず、防空壕に逃げた。

鹿児島市内には住む家など何もない。ガレキの中を各々片付け、ただ雨つゆを防ぐ丈のバラックのような小屋からご飯を炊く煙が漂う風景。

米なんてなかった。米粒なんて入ってない、さらさらの雑炊に、南瓜やイモ、[そのときに]ある物を入れて、食べられるものは何でも食べた。終戦になっても物資は何もなく、店でも何も売っていない。

そんな時に夢を見た。化粧品が一杯店に並んで、何でも買える夢だった。きっと何時かこんな日が来ると、ささやかな夢を描いていた。ただただ、毎日を夢中で過ごした。